

# ひとり文芸ミュージカル 乙姫 鑑賞記

おどひめさま 源川瑠々子

原作：万葉集 ● 原案：島崎藤村「浦島」 ● 脚本：スミダガワミドリ ● 音楽・演出：神尾憲一

2016年3月9日～14日 三越劇場

物語は、空と海との境なし。公演の終わり方は、夢と現実との境なし..... え？ここで終わりかな。どこかでパラパラと拍手が聞こえ、それにみんなが呼応して、やがて会場全体が大きな拍手に包まれた。竜宮からいきなり現実へワープしたので、思考一時停止。そういえば物語の始まりも、結果をほのめかしてから回想シーンの展開する。ふと映像的手法が頭に浮かび、映画『タイタニック』を思い出した。このラストは万葉集の海と陸の境の疑似体験か！？

さて、舞台は言わずと知れた竜宮城。ポッティチェリ『ヴィーナスの誕生』に描かれているような大きなホタテ貝が、乙姫様のソファ。

前半は、和の中に洋があるセンスの良い衣装に包まれた、源川瑠々子さんの美貌と歌唱力に彩られた存在感と、思わずステップを踏みたくなるようなビートの利いた音楽で引っ張る。後半は穏やかな音色おんしよくを連れてしっとり演じる中で、いつの時代にも起こる人間の罪を問う。

浦島伝説はいくつかあるが、ここでベースに使われたのは万葉集と島崎藤村の詩に詠われる「二人の運命の出会い」ヴァージョン。そこへ加わるのが一般的に知られている「亀」と「歓待」のストーリーである。しかしそのまま作るはずもない...再演があるかもしれないので、ストーリーの詳細は語らずにおくが、亀の正体、玉手箱の中身に意外性があって面白い。

ところで前作は、夏目漱石『こころ』のその後を描いた文芸ミュージカル『静』であったが、そのときはミュージカルという感覚ですんなりと受け止めた。しかし今回はむしろ「オペラ」に近いような感じがした。それというのも舞台セティングと歌のせいだろう。大きな背景の中で、難しい半音階をこなし、広域の高音から低音へ飛ぶときには声を伸ばしきったところで滑らかに降りる。「オペラ歌手」を名乗る中にも音を伸ばしきれない人がいるのに、よくこの豊かな音階を歌い切ったと称賛する。

また、口上を担当した柳志乃さん、上村奏夢さん。あ、高い音に飛んだ！と思わず構えたが、声の張りをキープした。和風ミュージカルなので、日本風に日本語を表現するのは難しいだろうと思う。

そして空と海との...いや、天と海との境なし。ある日、海で遭難したのは、少年時代に亀を助けた清らかな魂を持つ浦島太郎。乙姫はその心の優しさを偲び、永遠の命を与えようとする。美しいものほど忘れがたい。そして、この時期にして思う。この公演は3.11を挟む。浦島太郎の肉体は滅んでも、彼の魂は風に乗って飛んでいく。というところで、今度は「千の風になって」を思い出した。災害への鎮魂歌、戦争への戒め、女性たちへの労りと励まし、そして善と悪を背中合わせに持っている人間の罪。それらが心に去来した。忘れたい悲しみ、忘れてはならない悲しみが、乙姫の心の玉手箱の中にある。

2016.3.16 Junko Higasa